様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５６０７２５

研究課題名（和文）歴史博物館の建築展示を活用した体験型住教育プログラムの構築

研究課題名（英文）Study on the Practical Housing Education Program Using Architectural Display in Public Museum of History

研究代表者
碓田　智子（USUDA, TOMOKO）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：７０２７３０００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：全国に約5800館ある博物館施設のうち約60%をしめる歴史博物館には、民家や町並みの模型や実物大の建築展示、昔の住生活の道具など、住教育に活用できる実物教材が豊富に展示されている。本研究では、歴史博物館の建築展示の実態を把握するとともに、江戸時代の町並みを実物大で再現した大阪市立住まいのミュージアムをモデルに、建築展示を活用した体験型住教育プログラムを実践した。建築展示の中で、スタッフが関与して建物の特色や住生活を解説したり、展示内で体験的な学習をすることは、伝統的な住まいや住生活の理解に効果的であることを示した。

研究成果の概要（英文）：Many museums of history have large stocks of display items about architecture in the permanent exhibition room, but in many cases they are not used for housing education. The purpose of this paper is to find the characteristic of architectural displays, and to practice the model program to learn about Japanese traditional housing using display items about architecture. We practiced some housing education program using the full scale architecture displays in the Osaka museum of housing and living. We found that it was effective to learn architecture or housing culture in the full scale architectural exhibitions.

研究分野：都市計画・建築計画

科研費の分科・細目：建築・都市経済、住教育

キーワード：住教育　歴史博物館　建築教材　建築展示　体験学習

１．研究開始当初の背景

全国に約 5800 館ある博物館施設のうち約 60%をしめる歴史博物館の常設展示室には、民家や町並みの模型や実物大の建築展示、昔の住生活に関わる道具類など、体験型住教育に活用できる実物教材が豊富に展示されている。

代表者らは、2003 年以降、科学研究費等を受けて、公立の歴史博物館を対象に建築展示の調査を行い、調査結果のデータベース化を進めてきた。また、2006 年には、全国の歴史博物館と野外博物館（109 館）を対象にアンケート調査（第一住宅建設協会研究助成研究）を行い、そこでの学習支援活動の課題を把握した。

上記の予備研究の結果、①歴史博物館と学校教育の連携が強化されているが、歴史博物館の利用は小学校社会科の「昔のくらし」学習や中学校の歴史学習が大部分で、豊富な建築展示が住教育の視点からは殆ど活用されていない。②歴史博物館で用意されている学習資料や、昔の生活道具などの体験学習は小学生向けが大半で、中学生あるいは高校・大学生の学習に対応できるものは少ない。③歴史博物館の体験学習は体験ルームや研修室で行われることが多く、建築展示がある常設展示室が、体験学習の場としてはあまり活用されていないことが明らかになった。④一方、野外博物館では移築民家の建物解説のほか、民家内で行う昔の生活に関連した体験型学習のメニューが用意されている。それらは、屋内型博物館の常設展示室における民家の復元などの建築展示を活用しても、実施可能と考えられた。

また、研究代表者らは、教育実践の準備段階として、江戸時代の大阪の町並みを実物大で復元した常設展示室を持つ大阪市立住まいのミュージアムを対象に、小学生向けに体験型住教育プログラムをいくつか試行してきたが、高校・大学生向けプログラムの構築には至っていない。子ども向けの教育プログラムをさらに発展させるとともに、大学生にも対応できる体験型住教育のモデルプログラムを開発し、その実践と評価を行うことが発展的課題である。

２．研究の目的

本研究は、歴史博物館の建築展示を活用した体験型住教育プログラムの構築を目的に、①体験型住教育への応用事例として、野外博物館の民家展示を活用した体験学習プログラムの検討、②歴史博物館における実物大の情景再現展示を活用した学習プログラム事例の検討、③建築展示を活用した体験型住教育プログラムの開発、④体験型住教育のモデルプログラムの実践と評価を行う。特に、伝統的な住まいと住生活を学ぶ体験型住教育の場として歴史博物館の建築展示を有効に活用できないかというのが、本研究の意図するところである。

３．研究の方法

予備研究で作成した歴史博物館の建築展示と学習支援活動のデータを基礎資料として、(1)(2)の調査研究と、(3)学習プログラムの開発、および(4)研究分担者が館長を勤める大阪市立住まいのミュージアムをモデルとしたプログラムの実践と評価を行った。

(1)体験型住教育への応用事例としての、野外博物館の民家展示を活用した学習プログラムの調査

全国の野外博物館を対象に、展示の内容および学習支援活動を現地調査と学芸員へのヒアリングを行い、歴史博物館の建築展示を活用した体験型住教育プログラムへの応用方法を検討した。

(2)体験型住教育への応用事例としての、情景再現展示の特性とそれを活用した学習プログラムの調査

(3)歴史博物館の建築展示を活用した体験型住教育プログラムの開発

(4)大阪市立住まいのミュージアム（愛称大阪くらしの今昔館）をモデルにした体験型住教育プログラムの実践と評価

小学生、大学生、一般観覧者向けに、主に居住文化に関わっての体験型住教育プログラムを実践した。

４．研究成果

(1)野外博物館の建築展示を活用した学習支援について

実物大の建築展示は、日本民家集落博物館や博物館明治村などの野外博物館のほか、歴史博物館や民俗博物館の野外展示にみることができる。

わが国の野外博物館 51 館および民家の屋外展示を持つ歴史博物館９館の計 60 館を対象に、民家展示の内容については展示資料、学習プログラムについて、館のホームページと訪問調査時の資料から検討した。

野外博物館の建築展示は農家や町家などの民家などの移築・復元展示が 90%以上を占める。表１に示すように、展示棟数は４棟以下が全体の 48.3%と半数近くを占め、歴史博物館の野外展示の場合は２棟以下が 90%近くにのぼる。一方、博物館明治村（67 軒）、北海道開拓の村（52 棟）、川崎市立日本民家園（25 棟）のように博物館規模が大きく、展示棟数の多い館もある。

表１　調査対象野外博物館（60 館）の展示棟数

展示棟数	割合（%）
1～2	23.3（14館）
3～4	25.0（15館）
5～6	11.7（7館）
7～9	15.0（9館）
10～14	13.3（8館）
15以上	11.7（7館）
計	100(60館)

60 館のうち、約半数の 29 館に国の重要文化財の建築を保存展示する。また多くの館は博物館が所在する都道府県や市町村内にあった民家を移築展示していることから、観覧者にとっては実物展示を通じて、地域を代表する伝統的民家の建築様式を学ぶものとなっている。

野外博物館で一般観覧者向けのイベントとして行われている学習支援活動の内容は、わら細工や機織りなど民具を使ったものづくり体験、民話などを聞く、むかしの遊び体験、七夕やお月見などの年中行事の体験など、民俗分野に関連した昔の暮らしを観覧者に体験してもらう内容が多い。職人による伝統工芸・技術の実演、琴などの音楽コンサートを実施している館もある。小学校の中学年以上を参加対象にしている場合が多いが、内容的には子どもを中心に親子で楽しめるものが多いことが把握できた。

これらの学習支援活動の多くは、民家の土間や板間などを活用して行われている。観覧者にとっては、民家展示内で体験することで、間接的にではあるが、民家の空間の使い方や民家が持つ空間の雰囲気を感じ取れる効果があると考えられる。しかしながら、すべての民家を、座敷など床上空間を含めて、観覧者が自由に出入りして見学できるようにしている野外博物館は少ない。民家の保存状況により、立ち入りを制限したり、特定の民家のみを体験学習に開放している野外博物館が多い。

世界初の野外博物館であるスウエーデンのスカンセン野外博物館に代表される北欧の野外博物館では、敷地内で家畜を飼い、農作物を植え、また民家内では伝統的な衣装を着たスタッフが、あたかも当時の住民のように機織りや鍛冶仕事などをして、村や町の生活そのものを再現している事例がみられる。わが国の野外博物館の場合は、体験学習用の畑や花壇を持ち、博物館ボランティアが管理をしている館はみられるが、野外博物館を集落に見立て、生活そのものを人によって具現化して表現するものではない。

(2)歴史博物館における実物大の建築による情景再現展示の特色

歴史博物館の中には、竪穴式住居、農家や町家の民家、近代の店舗付き住宅などをほぼ実物大の大きさで展示し、その中に人形や生活道具、商品などを展示することにより、当時の暮らしを生き生きと再現する「情景再現展示」がみられる。

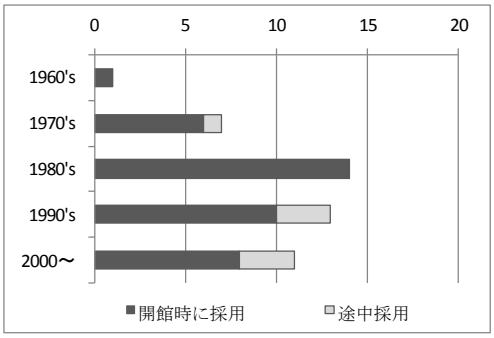
本研究では、既調査のデータも含めて、表２の 46 館に 103 件のほぼ実物大の建築による情景再現展示を確認することができた（一部、正確には縮尺が 10/10 よりやや小さいものも含む)。

開館時に実物大の情景再現展示を導入した館が 39 館と多く、開館後のリニューアルなどを機に導入した館が７館である。年代別にみると、1980 年代に 14 館、1990 年代に 13 館、2000 年以降は 11 館である。調査対象館のうち、実物大の建築による情景再現展示を 1980 年以降に導入した館が８割以上（82.6%）を占めている（図１）。

表２　分析対象の歴史博物館

no.	博物館名	開館年	no.	博物館名	開館年
1	神奈川県立博物館	1967	24	福岡市博物館	1990
2	北海道開拓記念館	1971	25	葛飾区立郷土と天文の博物館	1991
3	山形県立博物館	1971	26	文京ふるさと歴史館	1991
4	埼玉県立博物館	1971	27	大阪府立弥生文化博物館	1991
5	岡山県立博物館	1972(1971)	28	東京都江戸東京博物館	1993
6	鳥取県立博物館	1972	29	長野県立歴史館	1994
7	旧北九州市立歴史博物館	1975	30	愛媛県歴史文化博物館	1994
8	名古屋市博物館	1977	31	群馬県立歴史博物館	1994(1979)
9	岩手県立博物館	1980	32	宮崎県総合博物館	1996(1971)
10	下町風俗資料館	1980	33	鹿児島県歴史資料センター黎明館	1996(1983)
11	堺市博物館	1980	34	東北歴史博物館	1999
12	長野市立博物館	1981	35	香川県歴史博物館	1999
13	神戸市立博物館	1984	36	新潟県立歴史博物館	2000
14	岐阜市歴史博物館	1985	37	大阪歴史博物館	2001
15	和歌山市立博物館	1985	38	大阪市立住まいのミュージアム	2001
16	足立区立郷土博物館	1986	39	北九州市立自然史・歴史博物館	2002
17	深川江戸資料館	1986	40	福井県立歴史博物館	2003(1984)
18	石川県立歴史博物館	1986	41	秋田県立博物館	2004(1975)
19	千葉県立中央博物館	1989	42	山梨県立博物館	2005
20	新宿歴史博物館	1989	43	長崎歴史文化博物館	2005
21	斎宮歴史博物館	1989	44	島根県立古代出雲歴史博物館	2007
22	広島県立歴史博物館	1989	45	兵庫県立歴史博物館	2007(1983)
23	徳島県立博物館	1990	46	もりおか歴史文化館	2011

注）公開年と開館年が異なる場合、開館年を()内に記載



単位：館

図１　実物大の情景再現展示の導入時期（N=46）

46 館で把握できた 103 件の実物大の建築による情景再現展示の建築内容をみてみると、再現する建築物は、竪穴式住居、農家や町家、店舗付き住宅および附属屋の住宅関係が（86 件）で、全体の 80%強を占める。住宅関係以外では、カフェ、商店、駅舎、寺院などである。歴史博物館にみる実物大の情景再現展示は、住宅系の建築展示が中心になっていることがわかる。

実物大の建築による情景再現展示の導入時期と建築の種類、再現される建物の空間範囲の関係の概要をみると、1970 年代頃までは農家の囲炉裏端や土間部分などの室内の一部のみを、時代を特定せずに民俗展示の一部に展示することが多い。1980 年代に入ると、商家などの町家の展示が増え、室内だけではなく建物の形態がわかるようにファサード部分も再現するようになる。また、通史展示の中で、江戸時代の町家など、ある時代を特定して展示することが増える。さらには、導

写真１　大阪市立住まいのミュージアムの再現展示（江戸時代の大坂の町並）

入している館は少ないものの、建物単体ではなく、複数の町家などによって町並とそこでの生活を再現する展示（深川江戸資料館、広島県立博物館、大阪市立住まいのミュージアム（写真１））などが出てくる。こうした町並型の情景再現展示は、展示解説が最小限にとどめられ、観覧者が自由に展示室内を巡ることによって、再現空間を体感するものになっている。

この過程を観覧者の立場からみると、建物の室内空間とその使われ方をイメージできる展示から、建物の外観や意匠までが理解できる展示、さらには建物単体ではなく建物の連続性や町としての構成がわかり、空間として体験できるものへと発展していると捉えられる。

このように、歴史博物館の展示手法の一つとして、実物大の建築展示による情景再現展示が多く館で導入されている。しかしながら、訪問調査で把握できた範囲では、建物内の空間を利用し、建物内に観覧者に入ってもらって、展示解説を超える積極的な学習支援活動を行っている館は少ないことが把握できた。

(3)建築展示を活用した体験型住教育プログラムの実践と評価

以上(1)(2)から、つぎの点が把握できた。一つは、わが国の野外博物館は民家を活用した体験講座が学習支援活動として充実しているが、北欧の野外博物館のように、スタッフが当時の住人というシナリオで観覧者に暮らしを生き生きと伝える役割するものではない。二つ目は、歴史博物館では実物大の情景再現展示を展示室に導入する館が増えているが、野外博物館の民家のように、展示建物内で体験講座を行う館がほとんどないことである。

そこで、大阪市立住まいのミュージアムの近世の展示室をモデルに、建築展示を活用した体験型の住教育プログラムを実施した。当館の常設展示室には、江戸・天保年間の大坂の町並みが当時の建築工法を用いて実物大で再現されている。

この常設展示室の中で、つぎの４点を主軸にして、町家の建築や住生活を学ぶ体験型の住教育プログラムを企画した。

a)町家の建物とそこでの暮らしの工夫を学べること。b)北欧の野外博物館を参考に、スタッフは町家で暮らす住人という位置づけにすること。C)小学生対象の場合は、プログラムを一種の授業に見立て、指導案やワークシートを作成する。d)小学生に加えて、建築や住居学などを学ぶ大学生も学習できる内容にする。

①小学生を対象とした学習プログラム

「子ども大工体験」(平成 23 年９月 26 日)、「夏休みまちなみ探偵団一日入門」(平成 25 年８月 21 日）の２つのプログラムを実施した。いずれも小学生 20 名～25 名程度を一般募集し、ボランティアの大学生が町家に暮らす住人というシナリオで子どもたちを指導するものである（表３)。

「子ども大工体験」は、小学生の子どもと保護者同伴で実施した。館内の江戸時代の町並展示を巡りながら、大学生が子どもたちに、町家の戸締まりの工夫や建物の特色を解説したあと、町家に暮らす大工に弟子入りするというシナリオで、鉋がけや釘打ち体験、パズルづくりなどを体験してもらった（写真２)。大工体験には、大阪工業技術専門学校・技能学科の学生の協力も得た。

表３　「子ども大工体験」のプログラム

時間	プログラム
12:40～13:20	受付、挨拶、事前説明
13:20～13:50	木の学習（木造建物の仕組み、木の性質の話、樹種当てゲーム）
13:50～14:20	今昔館見学
14:20～14:35	休憩
14:35～15:40	大工体験（玄能、鋸、鉋）
15:40～16:40	パズル作り
16:40～17:00	アンケート記入、修了式

写真２　学生による座敷のしつらいの解説

「夏休みまちなみ探偵団一日入門」では、学習内容を「ミッション」と題して、子どもたちにインタビュー調査、潜入調査（写真撮影)、調査報告の３つのミッションに取り組んでもらった（表４)。インタビュー調査では、各町家を担当する学生に町家の特色や暮らしについて子どもたちが質問することで学ぶものである。また、潜入調査では、子ど

表４「まちなみ探偵団に一日入門」のプログラム

時間	内容
9:20	受付開始
9:30	オリエンテーション
10:30	ミッション1インタビュー調査（潜入調査開始）
12:10	ミッション2写真撮影
12:30	記念写真撮影
12:50	ミッション3調査報告（報告書作成）
14:45	休憩
15:00	発表・アンケート記入
16:00	解散

もたちが関心を持った町並展示をデジタルカメラ
で撮影してもらった。調査報告は、インタビュー調査と潜入調査の結果をまとめて報告するものである。

以上の２つのプログラムの子どもの感想シートから、小学生によって、町家の住人というシナリオ設定で情景再現展示を見学すると溶け込みやすいこと、実物によって住まいの特色や工夫が理解しやすいことが窺えた。学習目的を明確にする、子どもの関心に合わせた工夫をする、適宜アドバイスをするなどによって、効果的な学習支援を行えると考えられた。

②大学生を対象とした学習プログラムとその評価

建築や住居学を学ぶ学生の基礎教育として、大学１回生を対象に、江戸時代の大坂の町家の建築的特色と暮らしについて学んでもらうプログラムを作成した。住まいのミュージアムの実物大の情景再現展示は観覧者に自由に見学してもらう展示であるが、町家の建築的特色や住生活を大学生に充分に理解してもらうためには、何らかの学習支援が必要である。

表５　住まいのミュージアムの情景再現展示での学習項目と評価段階

番号	江戸時代の大坂の町並み・住まいの特色
1	江戸時代の大坂の町の形態（両側町）
2	木戸門
3	屋根葺き材料の種類（本瓦、桟瓦）
4	一戸建てと長屋建ての違い
5	町家の正面外観意匠（むしこ窓、そで壁、格子）
6	町家の戸の工夫（すりあげ戸）
7	ぱったり床几・半蔀（はしとみ）戸の工夫
8	会所（会所の役割、火の見櫓）
9	町家の間取り（みせのま・とおりにわ）
10	町家の台所（天窓・へっつい・水かめ）
11	坪庭（中庭）の役割
12	大黒柱
13	箱階段
14	座敷飾り（床の間・書院）
15	夏建具（簾戸）と建具替え
16	座敷のしつらい（屏風と掛け軸）
17	借家の裸貸しのしくみ
18	長屋の生活（共同便所・共同井戸・洗い張り）
19	つくりもの
20	お祭りの町並みの飾り（幔幕・提灯・屏風）

＜見学前の自己評価＞
1. よく知らない
2. 聞いたことはあるが、説明できない
3. よく知っており、説明もできる

＜見学後の自己評価＞
1. よく理解できなかった
2. だいたい理解したが、説明はできない
3. 説明できるくらい、よく理解できた

＜ワークショップ後の自己評価＞
1. よく理解できないままである
2. 理解は深まったが、説明はできない
3. 説明できるぐらい、さらに理解が深まった

そこで、ａ)学芸員が解説しながら展示室内を一通り見学する方法（解説型見学）と、b）展示室内の各建物に解説者（博物館ボランティアや指導役の学生など）を配し、建物を訪問した学資の問いかけに応じて解説を行う方法（訪問型見学）の２種類の学習支援を用意した。学生には、見学の前後において、見学で学べる 20 項目を示した学習評価シートに記入してもらうことで、学習効果の検証を試みた（表５）。

さらに、見学で印象に残った事柄を互いに紹介しあうワークショップを見学後に大学で実施し、ワークショップによる理解度の向上について学生に自己評価してもらった。

以上の結果から、自由見学だけでは、学生は町並み展示の建築や住生活のポイントへの理解が低いが、展示解説によって理解度が飛躍的に向上することが明らかになった。
見学直後の学習評価シートの結果では、解説型見学が訪問型見学に比して学習効果が高い結果となった。より主体的な学びとなる「訪問型見学」の場合は、見学箇所にバラツキが出て、それが学習評価の低さにつながったが、見学後のワークショップにおいて、学生間で情報や知識を共有化することで、学習効果が向上することが明らかになった。

③一般観覧者を対象としたプログラム

一般来館者を対象とした学習支援として実施した「町家の住人たちと体験する遊・職・住」(2013 年 11 月 30 日・12 月 1 日実施)は、情景再現展示の中に博物館ボランティアと学生ボランティアが町の住人として生活している様子を再現することで、生活感がある町の暮らしを知ってもらおうという試みである。

外国人を含む一般来館者に誘い掛け、情景再現展示の中で、大工体験や昔あそびなど昔のくらし体験のほか、各町家のポイント解説を行った。学生スタッフの報告書を検討した結果、来館者は、町並みの中で、昔遊びやお掃除体験、大工体験をすることで体験的に楽しく学習することができたものと思われる。しかし情景再現展示の中で何をどう体験できるのか、学べるのかを気づかないまま展示室を後にする観覧者が少なくない様子もうかがえた。自由に観覧できる情景再現展示の良さを生かしながら、「表示」や「案内」をわかりやすくする工夫が必要という提案が学生スタッフから多く出された。

歴史博物館の実物大の情景再現展示などの建築展示は、常設展示室内に設けられているために、野外博物館に比べて、利用する上での制約が多い。しかしながら、常設建築展示の中で、スタッフが関与して建築展示の建物の特色や住生活を解説したり、展示内で体験的な学習をすることで、観覧者の関心を喚起し、伝統的な住まいや住生活の理解に効果的であることを示した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　９件）

①増田亜樹、碓田智子、谷直樹、公立歴史博物館の常設展示の類型とその変遷に関する研究、日本建築学会計画系論文集、査読有、667 巻、2011、1745-1751

②増田亜樹、碓田智子、谷直樹、公立歴史博物館における通史展示の転じシナリオと展示設計、日本建築学会計画系論文集、査読有、671 巻、2011、235-242

③碓田智子・堀内友美・谷直樹、増田亜樹、ほか７名、大阪くらしの博物館の常設展示を活用した子ども向け体験学習プログラムー「子どもあきんど体験」と「匠の技に一日入門」、査読なし、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報、第９号、9-14、2011

④碓田智子、川下友里恵、谷直樹、増田亜樹、ほか４名、歴史博物館で活躍してほしい大学生の組織づくりプロジェクト、査読なし、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報、第 10 号、12-19、2012

⑤増田亜樹、碓田智子、谷直樹、公立歴史博物館の常設展示における情景再現展示の特性、査読なし、大阪人間科学大学紀要、第 11 巻、129-136、2012

⑥増田亜樹・碓田智子・谷直樹、来館者構成からみた情景再現展示の観覧行動の比較ー大阪市立住まいのミュージアムを考察対象としてー、査読有、生活科学研究誌、第 10 号、39-50、2012

⑦碓田智子、山本百合、谷直樹、藤田忍、増田亜樹、ほか３名、大阪くらしの今昔館の町並み展示の理解をすすめるための学習支援ー「訪問型見学」と「解説型見学」の比較からー、査読なし、大阪市立住まいのミュージアム研究紀要・館報、第 11 号、1-8、2013

⑧増田亜樹、碓田智子、谷直樹、公立歴史博物館における情景再現展示の再現内容と空間的特色、査読なし、日本建築学会近畿支部研究報告集・計画系、53 号、85-88、2013

⑨谷直樹、公立博物館の建築設計・展示設計と学芸員、査読なし、博物館研究、vol48-2、第 538 号、pp.10-13、2013

〔学会発表〕（計　３件）

①碓田智子、歴史博物館の情景再現展示を住教育に活用するための学習支援の試みと評価、2012 年度日本建築学会大会（東海）、2012 年９月 14 日、名古屋大学

②増田亜樹、公立歴史博物館における情景再現展示の再現内容と空間的特性、日本建築学会近畿支部研究報告会、2013 年６月 15 日、大阪工業技術専門学校

③増田亜樹、碓田智子、谷直樹、公立歴史博物館の情景再現展示における再現建物の特色、2013 年度日本建築学会大会（北海道）、2013 年８月 31 日、北海道大学

６．研究組織

(1)研究代表者

碓田　智子（USUDA, Tomoko）
大阪教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70273000

(2)研究分担者

谷　直樹（TANI, Naoki）
大阪市立大学・名誉教授
研究者番号： 40159025

増田　亜樹（MASUDA, Aki）
大阪人間科学大学・人間科学部･助教
研究者番号： 50441126

(3)研究協力者

新谷　昭夫（SHINTANI, Akio）
大阪市立住まいのミュージアム・特別研究員

深田　智恵子（FUKADA, Chieko）
大阪市立住まいのミュージアム・学芸員

服部　麻衣（HATTORI, Mai）
大阪市立住まいのミュージアム・学芸員